



特別支援教育の視点を取り入れ 自己肯定感を高める

校長 齋藤 博敏

「なんで、こんな簡単な漢字が書けないの、弟の〇〇だって書けるのに」
「どうして、二重跳びができないの、私は1年生で跳べるようになったわよ」
「いつまでグズグズしているの、もっと速く支度できないの」
こういった言葉ばかり受けている子は、どうなるでしょう？
「自分なりに頑張っているのに、他の子みたいにうまくいかない」
「自分にいいところなんて、ない」
「自分なんて、どうせダメな人間だ」



と、自分に対する自信、つまり「自己肯定感」がもてなくなります。自己肯定感がもてない人は、自分をも他者をも否定的に見るようになります。そうすると、人間関係がうまくつukれない人になっていきがちです。

今、学校現場では、「特別支援教育」の視点を取り入れた授業や指導が強く求められています。その根底には、「どの子どもできるようにしたい」という願いがあります。

特別支援教育というと、単に障がいをもった子どもの教育と誤解する人がいます。

違います。子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、そのもっている力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するために、適切な指導及び必要な支援を行うものです。つまり、**個に応じた適切な指導・支援によって、“できる”経験と自信を与え、一人一人の力を高めようとするのが、特別支援教育**です。

子ども一人一人がもっている力は違います。

そのもっている力にあった指導・支援を行うことは、大人の大切な務めなのです。

「周りの子と同じことができなくても、皆と一緒にいてくれればそれでいい」という大人がいますが、それは違います。周りの子たちはできるのに、他と比べて自分にはできないことばかり、という経験の連続では、子どもは将来にわたって生きていくための自信を失うばかりです。

その子なりのペースに合わせ、「〇〇ができるようになったね」と喜びを味わわせ、自己肯定感を高め、生きていく自信がもてるように育てることが、教師や親をはじめとする大人の責務と考えます。どの子にも“できる”経験と自信を与え、自己肯定感を高めていく。たくさんの大人に、特別支援教育の視点をもってほしいと思っています。



今学期も、学校のためにたくさんの御理解と御協力をいただきありがとうございました。

保護者の皆様、地域の皆様に、感謝申し上げます。

よいお年をお迎えください。